

兵庫県現代詩協会

会報51号付録・会報バックナンバー①

2022年7月1日発行・時里二郎

★第1号（1997年12月15日発行、8頁）

①設立総会（11月23日〈日〉）特集

「兵庫県現代詩協会の設立総会は一月二三日（日）午後二時から芦屋市民センターにおいて開催されました。当日までの入会予定総数一九四名のうち総会出席者八三名（決議委任状一二二名）でした。

直原弘道氏の司会で開会し、まず伊勢田史郎氏が総会に至る経緯を報告、つづいて同氏から会名・会則の議案が提案されて全員の挙手によって正式に設立しました。

次に役員選出について松尾茂夫氏から一月一七日の発起人会であらかじめ検討協議された役員人事にもとづく提案がおこなわれ、可決されました。

役員を代表して会長の安水稔和氏、顧問の杉山平一、小林武雄の両氏が就任のあいさつ、つづいて当日ゲスト参加の徳島現代詩協会五名を代表して同協会会長の宮田小夜子氏から祝辞をいただきました。

（このあと初年度の活動方針案ならびに予算について審議。そののち）総会出席者の自己紹介がおこなわれ、和田英子氏の閉会あいさつをもって午後四時設立総会を終えました。



「会報」第一号の表紙。創刊号から2号までは「兵庫県現代詩協会通信」という名称だった。

②設立当初の兵庫県現代詩協会会員の名簿（計199名）
③兵庫県現代詩協会会則

★第2号（1998年4月6日発行、4頁）

①〈案内〉第二回総会の案内（五月二日〈日〉）兵庫県教育会館記念公演（笠原芳光・京都精華大学名誉教授、演題「詩人の運命」）

②〈協会のおゆみ紹介〉設立準備会（第一回は1997年7月17日）から設立大会（1997年11月23日）を経て、常任理事会、理事会などの報告。

③〈案内〉「コンテイオ・ポエティカ12」（主催・徳島現代詩協会）兵庫県現代詩協会と徳島現代詩協会との交流会も兼ねて5月31日徳島県郷土文化会館（徳島市）で開催予定。講演は安水稔和

④〈案内〉「川のポエジー—詩と美術のコラボレーション」6月27日から7月19日に加古川市主催でおこなわれたイベントのお知らせ

⑤〈報告〉兵庫県現代詩協会が発足して最初の主催事業『講演と朗読の集い 明日への架橋』（サンピア明石）は1998年2月21日に開催された。参加八〇名（第一部は直原弘道の司会、明石ベンクラブ事務局長・谷村礼三郎、安水稔和・兵庫県現代詩協会会長の挨拶。つづいて多田智満子と金田弘の講演）

⑥会員の刊行物・県内情報など

⑦〈役員〉第1期役員氏名（会長）安水稔和（副会長）伊勢田史郎、直原弘道、和田英子（顧問）池田昌夫、小林武雄、杉山平一（事務局局長）松尾茂夫（会計）鈴木漢（理事）青木はるみ、朝比奈宜英、以倉紘平、市川宏三、大西隆志、金田弘、香山雅代、季村敏夫、志賀英夫、高須剛、たかとう匡子、高橋徹、高橋夏男、多田智満子、谷田寿郎、時里二郎、福井久子、藤木明子（監事）岡見祐輔、住吉千代美
⑧会員数206名（1998年4月1日）

★第3号（1998年8月13日発行、8頁）

この号より「兵庫県現代詩協会通信」から「兵庫県現代詩協会報」に名称変更

①〈報告〉第2回総会（5月2日〈日〉）兵庫県教育会館の内容紹介▽主な内容▽笠原芳光・京都精華大学名誉教授の講演▽年刊アンソロジー『兵庫／現代詩集（仮題）』発行に向けて

②会員の刊行物・県内情報／新入会員名簿など

③〈募集〉『兵庫／現代詩集』（仮題）発刊への原稿募集

④〈案内〉「秋の講演会・朗読会」（10月18日）のお知らせ▽姫路文学館講堂 第一部講演▽「詩と連句（仮題）」鈴木漢▽「夢前川の河童・遠地輝武」市川宏三

⑤二つのイベント参加報告▽「詩の架け橋ツアー——徳島現代詩協会との交流会」▽「川のポエジー——詩のアート展示」（報告者・高橋夏男）

★第4号（1999年2月16日発行、4頁）

①〈協会刊行物〉『ひょうご現代詩集'98』刊行。122名の参加。260頁。定価3000円＋税。本書は、兵庫県現代詩協会はじめての刊行物となる。同書の出版記念会（3月13日〈土〉）から神戸市・六甲荘で開催の告知。

②〈報告〉第2回「講演と朗読の集い——明日への架橋」が10月18日姫路文学館で開催された。第一部の講演は鈴木漢「対話する詩・連句」。つづいて市川宏三による講演「夢前川の河童・遠地輝武」。第二部は自作詩の朗読「阿木鉄郎、大西隆志、片岡英恵、小西たか子、小西誠、田村周平、時里二郎、浜田多代子、山名才、渡辺兼直

③会員の情報・動静／会員の刊行物／会員の詩誌——の紹介

★第5号（1999年7月1日発行、6頁）

①〈報告〉第3回総会が5月29日〈日〉西宮市民会館で開催された。主な内容紹介▽第二部はふたりの講演。福井久子は『E・パウンドとT・S・エリオット』を出版して。つづいて和田英子は「富田碎花と兵庫の詩人たち」がテーマ。▽第三部の自作詩朗読は、鮑浦敏、今村欣史、奥田博之、香山雅代、神田さよ、小林重樹、紫野京子、谷田寿郎、三浦照子

②〈募集〉『ひょうご現代詩集'99』発刊への原稿募集

③〈役員〉第2期役員氏名（会長）安水稔和（副会長）伊勢田史郎、直原弘道、和田英子（顧問）池田昌夫、小林武雄、

杉山平一(事務局長)・松尾茂夫(会計)・鈴木漢(常任理事)・高橋夏男、谷田寿郎(理事)・青木はるみ、赤松徳治、朝比奈宜英、以倉敏平、大西隆志、岡見祐輔、季村敏夫、志賀英夫、たかとう匡子、高須剛、多田智満子、高橋徹、田村周平、時里二郎、福井久子、藤木明子(監事)・住吉千代美、三宅武

④(詩誌紹介1〜5)▽「第三紀層」(発行所・第三紀層の会/1972年2月15日創刊)▽「湾」(発行人・高須剛/1995年12月創刊)▽「風媒花」(代表・岩川晶子/1990年6月創刊)▽「ベル・メゾン」(発行所・小西たか子/1993年10月1日創刊)▽「別嬪」(発行所・住吉千代美/1990年4月創刊)

⑤(報告)『ひょうご現代詩集'98』の出版記念会が3月13日(土)に六甲荘で開かれた。冒頭、安水稔和会長が挨拶。第二部では、青木はるみ、井上修子、川田あひる、北野豪一、小西民子、在間洋子、佐土原夏江、梓野陽子、高須剛、田中壯介、永井ますみ、中原緋佐子、由良佐知子が自作詩を朗読。第一部の司会は直原弘道、第二部の司会は和田英子。

⑥会員の刊行物・県内情報/新入会員名簿など

★第6号(2000年2月24日発行、6頁)

①(報告)『ひょうご現代詩集'99』刊行と出版記念会のお知らせ―谷田寿郎、和田英子共同編集による同著は、2月15日に発行。A5判256頁、参加会員は118名。▽同書の出版記念会が、3月18日(土)に兵庫県私学会館で開催の予定。

②(報告)「明日への架橋」(協会の定例秋季講演朗読会。今回は日本現代詩西日本ゼミナールとの合同開催。会場は、神戸風月堂グループ劇場。▽第一部「宗左近の講演」生きているのです。▽第二部「片岡文雄(高知)と安水稔和(兵庫)の対談「明日への架橋」」▽第三部「詩と朗読のメッセージ。朗読者は、森原直子(愛媛)、堀内統義(愛媛)、小野野枝(山口)、福谷昭二(広島)、田中郁子(岡山)、くにだまきみ(岡山)、田中のり子(島根)、川上明日夫(福井)、季村敏夫(兵庫)、大西隆志(兵庫)

③(詩誌紹介6〜10)▽「6番目の詩誌は資料欠」▽「幻想時計」(渡辺信雄、たかぎたかよし、仲清人、木辺弘晃、増田まさみ/1991年創刊)▽「プラタナス」(発行人・玉川脩香/1989年創刊)▽「文芸日女道(ひめじ)」(詩関係者・高橋夏男、玉川脩香ほか/1967年創刊)▽「現代詩神戸」(発行所・平岡久/1956年1月創刊)

④会員の刊行物・催しや行事などの情報

★第7号(2000年6月30日発行、6頁)

①(報告)第4回総会(5月20日(日)加古川市立勤労会館)の内容紹介▽第一部「総会での決定事項。会則の変更(協会に入会後2年を経過した会員は、80歳に達する会計年度から会費を免除されるなど)。

▽「秋の朗読会(明日への架橋)」を本年度から兵庫県の(ふれあいの祭典)の一環として「詩のフェスタひょうご」(11月19日・兵庫県民会館)として開催することを決定。従来の講演と自作詩朗読に加えて、広く詩作品を公募して(二般部分は全国ジュニア部分は兵庫県内)優秀作品を表彰する。▽第二部「詩人で英文学者の薬師川虹一が、1995年にノーベル文学賞を受賞したアイルランドの詩人であるシェイマス・ヒーニーについて講演。

▽第三部「自作詩朗読をしたのは、大川ひろ子、桂木恵子、香山雅代、彼末れい子、川田あひる、喜尚晃子、高谷和幸、玉田五郎、渡邊兼直、月村香。

②(報告)『ひょうご現代詩集'99』の出版について。118名の参加を得て上梓。その出版記念会が、3月18日に兵庫県私学会館(神戸市)において開催された。▽司会進行「田村周平、たかとう匡子▽会長挨拶「安水稔和▽作品朗読「井之上幸代、井上修子、江口節、佐土原夏江、佐藤勝太、鈴木絹代、高須剛、時里二郎、中嶋康雄、瑞木よう乾杯「伊勢田史郎▽スピーチ(編集担当者)「和田英子▽閉会挨拶「直原弘道

③(詩誌紹介11〜15)▽「MELANGE」(編集発行人・福田知子/1982年創刊)▽「貝の火」(編集発行人・紫野京子/1995年9月25日創刊)▽「Messia」(代表・香山雅代/1993年6月15日創刊)▽「輪」(創刊同人「中村隆、山本博繁、貝原六一、伊勢田史郎/1955年5月創刊)▽「火曜・代表「安水稔和/1984年6月創刊

④(エッセイ)「夕やけ 小やけ」仁紙禮子

⑤(エッセイ)「但馬から」國谷武夫

⑥会員の刊行物・催しや行事などの情報

★第8号(2000年12月20日発行、8頁)

①(報告)「詩のフェスタひょうご2000」が11月19日兵庫県民会館で開催された。まず公募されていた詩作品の「一般部門」と「ジュニア部門」の受賞者が発表された。

「一般部門受賞者」「ふれあいの祭典実行委員会代表会長

賞」水こし町子(兵庫県)／「兵庫県知事賞」佐藤勝太(大阪府)／「兵庫県議会議長賞」小倉みちお(静岡県)／「兵庫教育委員会賞」苗村和正(京都府)／「財」兵庫県芸術文化協会賞」渋谷魚彦(兵庫県)／「兵庫県現代詩協会賞」竹本知香(兵庫県)。佳作23名。

(ジュニア部門受賞者)「ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞」森下万理子(姫路)／「兵庫県知事賞」山原彩加(神戸)／「兵庫県議会議長賞」平木克昌(神戸)／「兵庫教育委員会賞」鶴飼聖理香(加古川)／「財」兵庫県芸術文化協会賞」伊藤茉莉奈(明石)／「兵庫県現代詩協会賞」宮川華奈(加古川)／「兵庫県現代詩協会賞」河島ひとみ(三木)。佳作20名。

▽総会は、「詩のフェスタひょうご」実行委員会会長の安水稔和、「ふれあいの祭典実行委員会」文化部部长の小林武雄のあいさつのもと、直原弘道が選考委員を代表して選評を述べた。ちなみに、今回はじめて詩の公募方式が採用された。▽第二部「杉山平一の講演「詩と常識」。

本会の出席者は130名。会の様子は、サンテレビジョンによって取材され、県の広報番組「フラッシュひょうご」の中で放映、紹介された。

②(エッセイ)「インド的思考と詩表現」奥田博之

③(エッセイ)「伝えたいもの」坂東里美

④(エッセイ)「雪ずりや夢から覚めぬ人のおりー冬の但馬から」山下晴久

⑤(エッセイ)「猫の顛末」中堂けいこ

⑥(詩稿)「ある日の詩」三木智

⑦(エッセイ)「柿の木」よしだみち

⑧会員の刊行物・催しや行事などの情報

⑨(報告)『ひょうご現代詩集2000』出版記念会の記録。本書は、兵庫県現代詩協会における三冊目の刊行物となる。2001年3月11日ポニー&クライドにおいて出版を祝う懇親会が開催された。参加者は44名。司会と進行は松尾茂夫、開会挨拶は安水稔和、乾杯は杉山平一、朗読は、今村欣史、池永英二、工藤恵美子、小西誠、たかはらおさむ、鈴木漢。

★第9号(2001年6月8日発行、6頁)

①(報告)第5回総会(5月27日(日)芦屋市民センター)の内容紹介▽第一部「総会」は安水稔和会長の挨拶について、

松尾茂夫事務局局長から、「詩のフェスタひょうご」「竹中郁と兵庫の詩人たち展」「ひょうご現代詩集」刊行、会報の発行などの事業報告がなされた。つづいて会のあらたな人事案が提出され、承認された。

第3期役員氏名(会長)安水稔和(副会長)伊勢田史郎
直原弘道、和田英子(顧問)池田昌夫、小林武雄、杉山平一、金田弘(事務局局長)たかとう匡子(会計)江口節(常任理事)鈴木漢、高橋夏男、谷田寿郎、松尾茂夫(理事)青木はるみ、赤松徳治、朝比奈宜英、以倉紘平、岩崎風子、大西隆志、季村敏夫、住吉千代美、多田智満子、高須剛、高橋徹、田村周平、時里二郎、福井久子(監事)三宅武、由良佐知子

▽第2部「高橋夏男の講演「原田の森の詩人たち」かつて神戸市灘区に関西学院大学のキャンパスがあった「原田の森(現・王子動物園)」を根拠地にした竹中郁、坂本遼らの詩業の紹介。
②〈報告〉「竹中郁と兵庫の詩人たち展」が「神戸市立王子市民ギャラリー」(現・神戸文学館)で開催されその報告。その冒頭には以下のような記述がある。

「兵庫県内に在住して、生前大きな業績を残した物語詩人たちは、たいていその地元で何らかの顕彰行事や忌日の集いが持たれ、毎年故人の手柄や業績が偲ばれている。たとえば龍野では三木露風の童謡祭、姫路では子供の詩を対象にした有本芳水賞、芦屋では全国の詩集を対象とした富田碎花賞などが年間行事として定着している。また足立巻一の夕暮れ忌、富田のライラック忌、最近は休止しているが坂本遼のたんぼ忌なども行われている。

そんな中で、昭和初期からシネボエムなどの新詩風でわが国の現代詩に顕著な足跡をのこした竹中郁さんを顕彰する行事や忌日の定期的な集いはまだ組織されていない。
三年後の二〇〇四年は竹中さんの生誕百年にあたる。その節目を機に、竹中さんを顕彰する行事を立ち上げ、定例化できないかという話題が会員のあいだに持ち上がった。」

③〈詩誌紹介19〜20〉▽「灌木第2次」(発行人・高橋徹/1995年6月に第二次がスタート)▽「乾河」(編集発行人・朝比奈宣英/1990年6月1日創刊)

④〈エッセイ〉「ヒバリのがっこう」山口洋子「文中に、坂本遼のふるさと東条に転居したことが機縁で、坂本の詩が引用

されている。

春 坂本遼

おかんはたった一人／峠田のつてんで歎にもたれ／大きな空に／小さなからだを／びよつくり浮かして／空いつばいになく雲雀の声を／ぢつと聞いてゐるやろで／／里の方で牛がないいたら／ぢつと余韻に耳をかたむけてゐるやろで／／大きい 美しい／春がまはつてくるたんびに／春がまはちてくるたんびに／おかの年の年によるのが／目に見えるやうで かなしい／おかんがみたい

- ⑤〈エッセイ〉「私の庭作り」中水流美代子
⑥〈エッセイ〉「阿漕焼海老徳利の唄」室井正彰
⑦〈エッセイ〉「永かつた余生」ななかとしひろ
⑧会員の刊行物・催しや行事などの情報

★第10号(2001年12月12日発行、8頁)

①〈報告〉「詩のフェスタひょうご2001」が11月11日兵庫県民会館で開催された。兵庫県現代詩協会として参加するのは、今回で二回目。まず公募されていた詩作品の「一般部門」と「ジュニア部門」の受賞者が発表された。

「一般部門受賞者」「ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞」「谷口謙(京都府)」「兵庫県知事賞」「坂東里美(兵庫県)」「兵庫県議会議長賞」「田上悦子(東京都)」「兵庫県教育委員会賞」「武西良和(和歌山県)」「(財)兵庫県芸術文化協会賞」「工藤恵美子(大阪府)」「兵庫県現代詩協会賞」「宇良博絵(兵庫県) 佳作28名。

「ジュニア部門受賞者」「ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞」「井澤弘美(百合学院小)」「兵庫県知事賞」「藤原真美(多可郡中町立中町北小)」「兵庫県議会議長賞」「にしわざちさ(愛徳学園小)」「兵庫県教育委員会賞」「石崎菜沙実(愛徳学園小)」「(財)兵庫県芸術文化協会賞」「寺田絵里菜(姫路市立広嶺中)」「兵庫県現代詩協会賞」「齋藤涼(姫路市立飾磨東中)」「兵庫県現代詩協会賞」「中山嵯史里(愛徳学園小) 佳作20名。

- ②〈エッセイ〉「詩は逃げ水か」石山淳
③〈エッセイ〉「時折、詩誌を読み返すと」佐伯圭子
④〈エッセイ〉「たぐいま!」鈴木絹代
⑤〈エッセイ〉「詩から語へ」宮川守

⑥〈詩誌紹介21〜22〉▽「アリエ」(発行所・以倉紘平/1987年9月20日創刊)
▽「階段」(編集発行人・伊勢田史郎/1989年10月1日創刊)

⑦〈詩碑探訪1〉「詩集『たんぼ』の詩人―坂本遼の碑―」井之上幸代 加東郡東条町横谷七四
⑧〈詩碑探訪2〉「モダンイズムの旗手―竹中郁の碑―」福田知子 沖繩戦でちった神戸二中(現県立兵庫高校)出身の島田 勲・沖繩県知事への追悼碑
⑨〈評論・メディアと詩(1)〉「マスメディア時代の―障害者の文学―」浜野仲二郎
⑩会員の刊行物・催しや行事などの情報

★第11号(2002年6月12日発行、8頁)

①〈報告〉第6回総会(5月12日(日)宝塚市立西公民館)の内容紹介▽第1部「総会は安水稔和会長の挨拶につづいて、たかとう匡子事務局局長から、「詩のフェスタひょうご」「竹中郁と子どもの詩展」「ひょうご現代詩集」刊行、会報の発行などの事業報告がなされた。

▽第2部「寺田操の講演「伊東静雄の読まれ方」があった。つづいて松尾茂夫の「チャップリンと詩人たち」について講演があった。のちに会場を宝塚ホテルに移して、朗読会と懇親会がもたれた。「朗読会はプログラム以外に飛び入りが多くあり、会場はことのほか賑わいをみせて会員相互の親睦を深めるいい会になった。」

②〈報告〉「竹中郁と子どもの詩展」が3月12日から17日まで神戸市王子市民ギャラリーで開催された。会期中の3月16日には竹中郁の甥にあたる洋画家の石阪春生と、安水稔和兵庫県現代詩協会会長との対談「竹中郁 ぼくのおじさん・わたしの詩人さん」が開かれた。対談のあと、JR灘駅山側の「ポニー&クライド」で懇親会が開かれた。

- ③〈エッセイ〉「詩とマスメディア」大賀二郎
④〈エッセイ〉「お気楽カメラマン」片岡英恵
⑤〈エッセイ〉「動かないうさぎ」北野和博
⑥〈エッセイ〉「海峡の街」内藤富美代
⑦〈評論・メディアと詩(2)〉「私のパソコン奮戦記」永井ますみ
⑧〈詩誌紹介23〜24〉▽「槐」(発行所・鳥巢郁美/1981年8月創刊)

- ▽「海馬」(代表・池間久志/1973年創刊)
 ⑨(詩碑探訪3)「喜志邦三の歌謡碑」森本敏子 阪急電車・西宮北口駅から徒歩5分の場所。
 ⑩(詩碑探訪4)「かなしき詩人―八木重吉の碑―」今村欣史 阪急電車・夙川駅下車、徒歩三分
 ⑪会員の刊行物・催しや行事などの情報
 ⑫(訃報)▽会員・四方章夫2001年12月29日
 ▽会員・鳳真治2002年3月29日
 ▽顧問・小林武雄2002年5月6日

★第12号 (2002年12月16日発行、8頁)

- ①(報告)「詩のフェスタひょうご2001」が11月17日兵庫県民会館で開催された。
 ▽第一部 司会はたかとう匡子。開会挨拶は、「詩のフェスタひょうご」実行委員会会長の安水稔和、つづいて、島田陽子が「詩と童謡」のテーマで講演。
 ▽第二部 司会は松尾茂夫。和田英子が選考委員を代表して選評を述べ、詩作品の「一般部門」と「ジュニア部門」の受賞者が発表された。
 (一般部門受賞者)「ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞」 北村均(広島県) / 「兵庫県知事賞」 田中澄子(岡山県) / 「兵庫県議会議長賞」 久野裕康(大阪府) / 「兵庫教育委員会賞」 朝倉裕子(兵庫県) / 「財」兵庫県芸術文化協会賞 浅野牧子(大阪府) / 「兵庫現代詩協会賞」 豊原清明(兵庫県) / 「兵庫現代詩協会賞」 種田裕之(兵庫県)。佳作30名。
 (ジュニア部門受賞者)「ふれあいの祭典実行委員会代表会長賞」 中塚三莉(愛徳学園小) / 「兵庫県知事賞」 中島裕実(小林聖心女子学院中) / 「兵庫県議会議長賞」 小汐南(姫路市立形的形小) / 「兵庫教育委員会賞」 畑祐作(洲本市立洲本第二小) / 「財」兵庫県芸術文化協会賞 小嶋真稀(姫路市立広嶺中) / 「兵庫現代詩協会賞」 寺田絵里菜(姫路市立西在田小) / 「兵庫現代詩協会賞」 小嶋真稀(姫路市立形的形小)。佳作24名。
 ②(エッセイ)「インド的思考と詩表現」奥田博之
 ③(エッセイ)「伝えたいもの」坂東里美
 ④(エッセイ)「雪ずりや夢から覚めぬ人のおり―冬の但馬から―」山下晴久
 ⑤(エッセイ)「猫の顔末」中堂けいこ

- ⑥(評論・メディアと詩(3))「マスメディアのこと」なすこういち
 ⑦(詩誌紹介25)「多島海」(発行所・江口節/2002年6月1日創刊)
 ▽「草」(代表・福田学/2002年1月創刊)
 ⑧(詩碑探訪5)「木立ちの中の碑―三木露風の詩碑―」西川保市 JR姫新線「本たつの」駅下車20分
 ⑨会員の刊行物・催しや行事などの情報

③(退任挨拶)安水稔和「ゆつくり生まれよう―会長退任にあたって―」(13号収録)

一九九七年十一月二十三日の兵庫県現代詩協会の設立総会の席上、「やわらかい絆でゆつくり」と私は挨拶した。まあ、ゆつくりやりましょうということ、あれから三期六年、ゆつくりやってきた。

もともと詩を書く者が集まること自体が難しいことだと、みんなが思っていた。これまでに何度か提唱されたことがあり、その相談に加わったこともあったが、いずれもが成立するに至らなかった。それが突然に自然にあつというまに実現したのである。それはなぜなのか。

設立一年後に書いた文章、『ひょうご現代詩集'98』の序文のなかで、私はそのことに触れて三点を挙げていた。

(1) 阪神大震災後に出版した『詩集・阪神淡路大震災』への多くの詩人たちの参加にみられる意識の変化。

(2) 個人の才能・個性を重視してきた現代詩の現状への問いかけ。

(3) 顔を合わせることのなかった人や未知の人と出会う機会。

この三点のどれもが当たっているだろうと書き、つづけて「さまざまな思いを積んでの出立である」と書いていた。さらに今すこし細かく、「おたがいの仕事を知り合い、広く詩の話題を語り合い、他分野の人々との交流を心がけ、豊かに持続していければと思っている」と書いている。

このような思いでスタートして六年、なにができるかなあ、できることからしようということ、みんなで力をあわせて取り組んできた。

このような思いでスタートして六年、なにができるかな、できることからしようということ、みんなで力をあわせて取り組んできた。

総会でのお會員諸氏の講演と朗読。日本現代詩人会と共催の

- ⑪(訃報)▽会員・明石長谷雄2002年7月28日
 ▽顧問・池田昌夫2002年10月19日

★第13号 (2003年6月10日発行、8頁)

- ①(報告)第7回総会(5月11日(日)神戸市・ラッセホール)の内容紹介▽第一部 総会では安水稔和会長の挨拶につづいて、たかとう匡子事務局長から、「詩のフェスタひょうご」

西日本ゼミナールや徳島県現代詩協会との交流会。このところ毎年開いている「詩のフェスタひょうご」への県内外の詩人たちの参加。いろんな場で思いがけない広がり生まれ、様々の関心がかき立てられた。現代詩の直面している諸問題を考える手がかりを得たのは私だけではなかったはずだ。

瀟洒な装丁の年刊アンソロジー『ひょうご現代詩集』は一冊一冊が時代の詩の姿を映す得がたい貴重な資料となるだろう。

過去三回つづいた「竹中郁展」は来年(2004年)三月にも詩人生誕百年記念展として開催されることになった。これは日本の代表的詩人の一人竹中郁の顕彰にとどまらず、詩の百年を考えるよすがとなるはずである。個人的には、竹中郁研究に欠かせない数々の資料を発掘することができたのは幸運だった。

ひとりで見えていたとき見えていたものが、たくさんの人といっしょに見ると不思議にもつとよく見えてくることがある。たくさんの人といっしょに見てよく見えてきたものを、今度はひとり持ち帰ってひとりで見ると。

『ひょうご現代詩集'02』の序文「ゆつくりと生まれる」で私はこんなふうにも書いている。「世界はどうなるのか。私たちはこの世界をどうしたいのか。私たちはどうありたいのか。ともすれば一人一人がばらばらになりがちの今、私たちが繋ぐものはなにか」。このように自分に問いかけてから、「言葉によって私たちは繋がる」と答えている。それも、「ひとつに取赦されるのではない、それぞれの言葉をかかえて生きるのだ」と続けている。それぞれの言葉。

この六年、長いような、短いような、私にとって色々な意味で大切な年月であった。この六年、多くの人に支えていただいたことを感謝したい。

今、私はサンテクジュベリの言葉をあらためて思い起こしている。「ゆつくりと生まれる」。さあ私たち、ゆつくりと生まれようではないか。

「竹中郁と仲間」の詩人たち展」、会報の発行などの事業報告がなされた。つづいて新役員人事案が提出され、原案どおり可決した。

第4期役員氏名(会長)伊勢田史郎(副会長)鈴木漠、福井久子、松尾茂夫(顧問)杉山平一、金田弘(事務局長)たかとう匡子(会計)江口節(常任理事)直原弘道、安水稔和、和田英子、高橋夏男、谷田寿郎、三宅武(理事)青木はるみ、赤松徳治、以倉紘平、岩崎風子、大西隆志、季村敏夫、志賀英夫、高谷和幸、田村周平、時里二郎、村中秀雄(監事)大賀二郎、由良佐知子

▽第2部 直原弘道の講演「戦後サークル運動の中から戦後文化サークル運動の誕生と変遷について」があった。

②(報告)「竹中郁と仲間」の詩人たち展」が3月11日から16日まで神戸市王子市民ギャラリーで開催された。堀辰雄、小磯良平、福原清、井上靖など17人の仲間についての説明展示な

②新会長の挨拶(第14号収録)

伊勢田史郎「遠くまで、フェスティナ・レンテ」

安水稔和さんの退任の後を受けて、会長の役を担当することになりました。どうぞよろしく、お願い申し上げます。

阪神淡路大震災の後に、求められて、神戸市民文化振興財団の機関誌に一文を草したことがある。都市の復興と、芸術文化のそれとは分ちがたい。そのためには、「ゆつくり、急ぐ」必要があるのではないか、などと。

フェスティナ・レンテ(Festina Lente) Ⅱ「ゆつくり急ぐ」というラテン語の諺がある。急ぐのに、ゆつくりする、とは、どうも矛盾している。ただ、ゆつくりといつても、徒らに時を費やすのではなく、目的を成し遂げるためには、時間をかけて確実に歩いて行け、というのであろう。急げ、とは、問題を先送りせず、結果を得るために前進せよ、というのだ。

安水さんは、六年前の設立総会で、「やわらかい絆でゆつくりと」と挨拶され、会はそのように、「鬼と亀」の亀のようだが、未来に向けて確実に展望を切り開いて行きつつある。イタリアの箴言にも、「ゆつくり行くものが遠くまで行く」と見える。フランスでは、また「ゆつくり行くものは確実に行く」という。まるでつこいように思われるが、「ゆつくり」というのは、素晴らしい智慧であり、行動指針なのだ。

どこかの大統領や、こちらの首相に噛み締めてもらいたい

ど。会期中の3月15日には兵庫県現代詩協会顧問の杉山平一と安水稔和会長との対談「詩人たち・竹中郁の親しい仲間たち」があった。そののち場所を変えて『ひょうご現代詩集2002』の出版祝賀会が開かれ盛況であった。

③(退任挨拶)安水稔和「別枠表示」

④(エッセイ)「歌の民」由良佐知子

⑤(エッセイ)「詩人の魂を持ち続けた作家」大塚子悠

⑥(エッセイ)「蘭の花」山南律子

⑦(エッセイ)「身辺雑記」松尾繁晴

⑧(詩誌紹介27〜30)▽「ふらくたる」(発行人・池永英二(個人詩誌)／2003年2月創刊)

▽「Contralto」(発行所・坂東里美／2002年12月1日創刊)

▽「縞猫」(発行人・中堂けいこ(個人詩誌)／2001年4月創刊)

言葉ではないか、と思ったりする。

ところが、七十五年の自らの人生を顧みる時、随分ゆつくり歩いて来たのは事実なのだが、時折、歩くのが面倒臭くなつて、必要以上に、のろのろして来たとの思いがある。これは、前出のフェスティナ・レンテとは似ても似つかぬ怠惰な生き方だ。昭和二十二年(一九四七)に、中村隆さんと山本博繁さんを中心にして、「クラルテ」という詩誌が創刊され、私も同人として詩を発表していた。しかし、積極的ではなかったので、よく尻を叩かれた。

「酒ばかり飲んで、詩を書けよ」

「詩のタネ、街の中にごろごろあるやないか」

前のは中村さん、後ろのは山本さんの言。もつとも、この二人(特に中村さん)は私と一緒に、よく飲み歩いていた仲なのだ。

私は、心のなかで、山本さんの言葉に反撥していた。(何で、ごろごろ、町の中に詩の材料がごろごろあったりするものか。詩は、ダイヤモンドのように、いや、それ以上に貴重なものなんだから…)などと。後年、中国・南宋の陸游という詩人が、「詩の材料は路上に満ちているのに、誰ひとりとして掬い取る人はいない―詩材満路無人取―」と述べているに出合つて仰天した。山本さんは游と殆ど同じことを言っていたのだ。北宋を滅ぼし、東北や華北を支配した金に対し、つねに抗戦を唱え、慷慨の詩を書きつづけた不遇の詩人陸游のことを、あの頃、山本さんは既

▽「OTAKUSA(あぢさゝ)」(発行人・鈴木漠／2003年2月20日創刊)

⑨(詩碑探訪①)「魚吹八幡神社まつりを見守る詩碑―池田昌夫の碑―」小西たか子。山陽電車「網干駅」下車、北へ徒歩10分。

祭りの夜 池田昌夫

無数の提灯が／実つた稲田に反映し／果てしない星空に／金色の神輿の囀路は／揺られ 揺られて／神がみの歓喜の響きを立てる／御旅所に着いた神輿に／山の幸。海の幸が／笙のひびきの中に供えられ／神官の祝詞が深夜の静粛に／おごそかにひびきたる／氏子の幸と実りの秋を祝いつつ／私たちはそろって拍手を打つ／むしろひれ伏す私たちの魂に／悠久の歴史がよみがえる

に知っていたのだろうか。そんな話もしてみたい、と思つていううちに彼は逝つてしまった。

敬愛している先達で、哲学者の清水正徳さんから、その著『働くことの意味』を頂いた。岩波新書なので、ポケットに入れて持ち歩き、電車の中などで読んでいた。大きさは手ごろといつていいのだが、内容は濃密で手強く、決してハンディーなどではない。いろいろと考えさせられる本で、人はパンのためだけに働くのではなく、志のためにこそ働きたいもの、と思わされたりした。

そういえば、中村隆さんもヤマヒロ(山本博繁)さんも、陸游がそうであったように、志の人であった。中村さんは、ある秋の未明、脑梗塞で倒れ、不帰の客となるが、その前夜おそくまで、体調が悪いのに、依頼されていた詩作品を書いていった。詩に殉じたといえる。ヤマヒロさんは、象徴詩からモダエズム詩、そしてリアリズムの詩へと移つていく。一方、定時制高校の教師として、社会の不平等や人間の悲しみを鋭く感受し、組合運動に専念、脑梗塞で倒れるが、再起すると同病の人たちを結集、励ましあう団体を組織、人びとに生きる喜びを与えた。

「詩は志を言う」と、中国の最古の經典の一つ『書経』にある。彼らは、それを身をもって体現した。それにしても、少しばかり急ぎ過ぎたではないか、と感じたりする。

この協会は、未来へ向けて「遠くまで行く」。だからこそ、「ゆつくりと……」。

『播州平野の稲穂が頭をたれるころ、八幡宮の秋祭。伝統のある提灯に灯された灯が、揺れながら宮めがけて集まってくる。』

魚吹八幡神社の歴史は、昭和五十三年に既に「創祀千六百五十年祭」が挙行されたくらい古いものであると、詩集『祭の夜』に作者の自注があるが、悠久の時間の流れとともに日常の生活にめりはりを付け、一気に祭へところ躍らせる景を味わいつつ詩碑の前に立つと、三十歳の若き氏子総代を務められた姿が偲ばれ、詩がより身近になってくる。五月の風に揺れる樟の木陰に入ると、「アメリカ詩」を熟っぽく語られていた教授の顔が浮かんでくる。

⑩〈詩碑探訪⑧〉「神戸詩人」「火の鳥」の詩人―小林武雄の碑―別枠表示

⑪会員の刊行物・催しや行事などの情報

⑫〈訃報〉▽理事・多田智満子2003年1月23日

▽名誉会員・内田豊清2003年3月8日

▽会員・平田守純2003年4月23日

⑩〈詩碑探訪⑫〉「神戸詩人」〈火の鳥〉の詩人―小林武雄の碑―時里二郎、県立播磨中央公園石碑の丘。

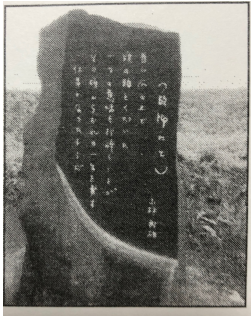
「故郷にて」青い石の上で 嫂の頭を砕いた／一つの意味を打ち砕くことが／その頃からおれの一生を費やす仕事となったようだ

小林武雄

この詩碑の脇に、「詩人集団『火の鳥』設立趣意書」の自筆稿がプレートされている。

『人々はうるほひに絶望してゐる。人々はすぎとほつた精神達に見離されてゐる。求められてゐるのは眞実のうただ。』(原文のまま)

一九三七年に「神戸詩人」を創刊し、諧謔味の強い独特なシュールレアリスムの手法で社会を先鋭



★第14号 (2003年12月10日発行、8頁)

①〈報告〉「ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご」の報告
▽(第一部)安水稔和の講演「ことばの世界」―「あのね」のつぶやきから発する三歳の子のことばの紹介から、心の中にあつたものが引つ張りだされる。詩のことばのすごさ、おもしろさ、大切さなど詩の発生について、また演題の「ことばの世界」の「の」を「が」、「は」、「と」と変えながら、詩におけるテニヲハの助詞一字の使われ方によってことばの世界が大きく変わるなど、竹中郁の詩も紹介しながらの講演は熱心に聞き入っていた。

▽(第二部)司会・福井久子。鈴木漠が選考委員を代表して一般部門(含む高校)とジュニア部門の選考結果を報告。つづいて表彰式と入賞者による朗読にうつった。閉会の挨拶は

②新会長の挨拶 伊勢田史郎「遠くまで、フェスティナ・レント」松尾茂夫。(入賞者の氏名は省略)

③〈エッセイ〉「予期せぬこと」永井薫

④〈エッセイ〉「推敲詩人の双壁・山之口貌と宮沢賢治」鮑浦敏

⑤〈エッセイ〉「コリン・デクスターとモース警部」渡部兼直
⑥〈エッセイ〉「ぼくの場合」さかたしげし

に浮かび上がらせる作品で知られた。一九四〇年には、モダニズムの詩人たちが弾圧された例の「神戸詩人事件」で実刑判決を受けたが、戦後いちやく一九四六年にこの趣意書にある「火の鳥」を結成。そういう詩史のページを繙いてみると、この熱いことばの背景が伝わってくる。

『あの専横に耐え反抗してきた我々の詩は生々しい傷跡を曝してはゐるが、自由のために闘った昔日の情熱はいまもくれないに血吹いてゐる』(原文のまま)

詩はことばである以前に生き方そのものだった時代が確かにあった。いや、今もそうなのかもしれない。ただそのことがわかりにくくなっているだけのことか。

「眞実のうたは」は意味を打ち砕かなければ聞こえてこないという詩人の信念が、碑に刻まれた詩句の行間ににじみ出している。

一九五三年に「半どんの会」を結成して、文化を担う人々の情熱を注いだのも、「うるほひ」や「すぎとほつた精神」や「眞実のうた」を求めて止まない詩人の魂のあらわれにほかならない。

⑦〈エッセイ〉「震災九年目の思い」佐土原夏江
⑧〈エッセイ〉「市民の学校と君本昌久」梅村光明

「かつて神戸の街に、「市民の学校」と名付けられた文学学校が在った。小説や詩を学ぶために、開校以来二千名名近い人々がそこに集まったという事実が、今や時の流れと共に忘れ去られようとしている。

「市民の学校」一九六六年四月次のような趣旨を挙げて設立された。

「市民の学校は、現在の大学にあきたらない学生、職場にあつて自立した思想を学びとろうとするサラリーマン、OL、子どもと共に新しく勉強しようと思う母親、今流行のやり方以外の方法で余暇を使おうと考える人たち、第二の人生に入つて、さらに生きがいを求めようとする人たちに、マスプロ教育を是正した寺子屋方式で、新しい文学の広場をつくらうとして開設しました。」

第一期の講義コースは小説、現代詩、外国文学、短歌、俳句、美術、漫画という、目を見張るような講師陣だったが、私が入学した第九期(一九七四年)には、小説と現代詩のコースだけになっていた。ともあれ、「新しい文学の広場」には多くの若い仲間が集まり、青春という刺激的な日々を過ごすことができた。(以下略)

⑨〈詩碑探訪⑨〉「よく記憶すること―安水稔和の詩による震災詩」森本敏子 明石公園正面入口の芝生広場の北西の隅。

⑩〈詩碑探訪⑩〉「風鈴と木ねじ」杉山平一の二篇の詩―紫野京子。JR加古川線滝野駅下車南西に2キロメートル。

⑪会員の刊行物・県内情報など／県内詩誌・機関誌・雑誌／関連行事／会員情報／他府県詩人団体情報／他府県詩人団体の年刊詩集

★第15号 (2004年6月17日発行、8頁)

①〈報告〉第8回総会は、2004年5月30日(日)午後1時半からサンピア明石4Fの平安の間で開催された。

司会は伊勢田史郎会長。総会議長に直原弘道事務担当理事を選出。その司会によって議事が進行。たかとう匡子事務担当理事から2003年度の活動として「竹中郁生誕百年記念展」併設 ひょうご詩画展2004 兵庫・詩の現在、年刊詩集、会報発行などが報告された。

(講演)講師は田中壮介。テーマは「荒ぶる神々―播磨風土

記』をめぐって。

②(報告)「竹中郁生誕百年記念展と年刊詩集出版記念会」
3月16日〜21日までの間、兵庫県立美術館・原田の森ギヤ
ラー東館で「竹中郁生誕百年記念展」が開催された。竹中郁
みずから編集した戦前の雑誌や、戦前戦後の発表誌、今回の
資料整理中にみつかったB6判の創作ノートも展示された。
▽(対談)会期中の20日(土)には午後2時半から飯島耕一
と安水稔和による対談「詩的雑談―西脇順三郎と竹中郁」が
もたれた。そのあとポニー&アイランドで6冊目となる年刊
詩集『ひょうご現代詩集』の出版記念会が開催された。
③会員の刊行物・県内情報など／県内詩誌・機関誌・雑
誌／関連行事／会員情報／他府県詩人団体会報／他府県詩
人団体の年刊詩集

★第16号 (2004年12月15日発行、8頁)

①(報告)2004年11月14日兵庫県民会館にて開催された
「第5回ふれあいの祭典―詩のフェスタひょうご」の報告
▽(第一部)鈴木漠の司会で進行。開会挨拶は、同フェスタ
実行委員長の伊勢田史郎。「中国の韓愈や夏目漱石の詩や言
葉を引用し、自分の体験とだぶらせながら「詩は現実には役
に立たないかもしれないが、長く自分を支えてくれる。詩は
未来に人間の心を癒し、なぐさめ、方向性をもっているの
ではないか」などと語る。
続いて、扶川茂が「私の少年詩」と題して講演した。「少年
年詩」とは少女のために大人が書いた詩でこどもが書い
た児童詩とは違う。」として書いて書いた『教室詩集』を披露
した。
▽(第二部)司会進行・たかとう匡子。福井久子が同会選考
委員を代表して「一般(含高校)応募者136人」ジュニア
部門「応募者389人」の選考結果を報告(各賞入賞者の氏名は
省略)。
②(エッセイ)「喜志邦三と翻訳」福井久子
「喜志邦三の仕事は大まかにいって三つの分野にわけられ
ることができる。一は詩人としての仕事。二は歌謡、三は大学教
授としての仕事(翻訳も含む)である。『喜志邦三選詩集』、翻
訳『現代アメリカ詩集』と『現代イギリス詩集』(共に昭和
6年刊)、さらに『スペイン民謡集』(昭和7年刊)及び、『ハン
ガリー民謡集』に目を通すと、それら訳詩集の『緒言』から

うかがえるのは、喜志邦三の詩人としてのレーゾンデートル
である。」

さらに、喜志邦三の翻訳に対する態度が紹介されている。
「民謡の翻譯は私の本格的な力作ではないが、甚だ反って暇
のすきびといふような心安さでひそやかな抒情精神を盛る
ことが出来た。翻譯の態度としては前の『スペイン民謡集』
の場合と同様、音楽的要素を尊長した。この方が私の詩心に
適ふところがあつたからである。(『ハンガリー民謡集』より)」

③(エッセイ)「流行りもの」尾崎美紀
④(エッセイ)「敦煌寸見」小西誠
⑤(エッセイ)「ちいさな旅」梓野陽子
⑥(エッセイ)「丹波と私」田中信爾
⑦(エッセイ)「献堂式」小西正巳
⑧(エッセイ)「生命あるものの宿命―吉沢独陽さんの本」志
賀英夫

⑨(エッセイ)「散歩道」高橋富美子
⑩(詩碑探訪⑫)「兵庫讃歌―富田碎花詩碑―」和田英子

東郡滝野町下滝野の県立播磨中央公園。「兵庫讃歌」は197
1年(昭和46)に県から委嘱され制作された作品。序章、丹
波・但馬篇、摂津・播磨・淡路篇I&II、終章で構成された
長篇詩。作曲は別宮貞雄。
兵庫讃歌 富田碎花
―いつかきた道への回帰と
五弁の花のファンタジー

序章

時としてせわしい息づかいに喘ぎもするが／あかるい微
笑を絶えずおくる花弁は五つ。／それぞれに精いっぱい
の生きようを続ける。／そのつながりが全幅の機能をは
たし、人々は肌をよせ合せて繁栄への道を辿り、襟
を正してきまりに応える姿勢をくずさぬ。／それにつけ
ても底の知れない、桁はずれの迫力をもつ／この規制は
どこから生まれてくるというのか。

⑪(詩碑探訪⑫)「花と流星の詩人―植原繁市の詩碑」高橋夏
男。JR神戸線「宝殿駅」下車、車で北に15分。

植原繁市(明治41―昭和46)は志方町(現加古川市)の村役場
の収入役を務める。「孤独のなかで清澄かつロマンチックな
叙情性、感性的な把握と表現に冴えを見せた。詩集『花と流
星』(昭和9年、神戸詩人協会)がある。また、すぐれた童話を

神戸新聞に連載したり、戦後し植原枝月の名で、俳人として
佳句を残した。」

寂しき 植原繁市
人に告ぐべき／寂しさにはあらぬ／ゆふぐれをひとり
杜にきて／しみじみと樹をゆする／泣けばとてかへ
るものかよ／告げばとて癒ゆるものかよ／しみじみと
樹をゆする

⑫会員の刊行物・県内情報など／県内詩誌・機関誌・雑
誌／関連行事／会員情報／他府県詩人団体会報／他府県詩人団
体の年刊詩集

★第17号 (2005年6月17日発行、8頁)

①(第九回総会の報告)5月22日(日)午後一時半から姫路
文学講堂(北館3F)で開催された。総会に先立ち、午前11
時半から同南館で第17回理事会を開いた。

総会では伊勢田史郎会長の開会挨拶のあと、総会議長に鈴
木漠副会長を選任し、その司会で議事を進行。たかとう匡子
事務担当理事から2004年度の活動報告が行われ、「詩の
フェスタひょうご」「貴志邦三回顧展 兵庫・詩の現在展」
ひょうご詩画展2004」の行事や年刊詩集、会報の発行な
どの年度の報告があった。

②(新役員)「福井久子(会長)▽鈴木漠、たかとう匡子、松
尾茂夫(副会長)▽玉井洋子(事務局長)▽小西誠(会計)
▽(常任理事)「直原弘道、和田英子(事業)・高橋夏男(会
報)・谷田寿郎、三宅武(年刊詩集)」

▽(理事)「赤松徳治、以倉絃平、伊勢田史郎、岩崎風子、大
西隆志、田村周平、時里二郎、安水稔和、由良佐知子
▽(監事)「江口節、高谷和幸」

(講演)講師は寺本躬久が「敗戦直後の姫路で興った詩活動」
と題して講演。「かつて自身も同人だった「IOM同盟」の詩
観について、戦地から帰ってきた当時の同人たちの心情を交
えて熱く語られ、有意義な研修だった。」

③(退任挨拶)「禹歩」で明日につながるものを「伊勢田史郎
④(エッセイ)「そんな時が来た」金田弘
五月初め、鎌倉在の大学時代からの親友Nから便りが届い
た。Nは詩人である。

「老残り生き、皆いなくなった。……毎日絵を描いてい

る。もう一千枚を超えた。絵を描いたあと、畑仕事をしてい
る。テレビも新聞も、何も見ない、読まない。……生きてい
るうちに君に会うことも出来ないだろうが、この鎌倉で新緑
と無言でつきあっている。……八五歳」
そうなのだ。オレたちに、やつとこういう時が来た。この
世で生き、この世で人知れず消えていく。そんな時がようや
くやって来たのだ。

この二月、かけがえないオレの友が一人消えていった。
その名は羊歯三郎。昭和二十五年から皆光茂と詩誌『天蓋』
を刊行していたが、途中、自ら死亡通知を出し、詩作を絶つ

☆新会長の就任挨拶(第18号収録)
福井久子「言葉の繋がり」の多様性―会長就任にあたって―

お二人の優れた前任者の安水稔和・伊勢田史郎両氏の後
をついで会長に就任することになりました福井久子です。力
不足の者ですが、よろしくお願い致します。

一九九七年十一月二十三日の総会で現代詩協会が設立さ
れてから、足かけ十年に近い歳月が過ぎ去ろうとしていま
す。設立準備委員会の席上で、その時までお名前は存じ上げ
ていたが顔は初めての方、お名前もお顔も初めての方、よ
く存じ上げていた方等ざらりと席に着かれており、兵庫県に
は多くの詩のグループと詩人が活躍されていることに驚く
と同時に、詩を書いていながら、そのようなことに驚いてい
る不明を恥じたのを思い出します。しかし、考えてみれば、勿
論私程のことではないとしても、お互い同士の交流がグルーブ
に限らていたり、各地域外のことで目が届かないのが、当
時までの状況ではなかったかと思われれます。詩人達が互いの
交流を深め合うことにそれ程重きを置いていなかった、とい
うより、第二次世界大戦後の混乱を生き抜いてきた各自のレ
ゾンドートルを、確立することに忙しかったのでしょう。

だが、一九九五年一月十七日の阪神淡路大震災を経験する
中で、従来の価値観が揺いで、私達の足許が寛東なくなつた
ことが、また、互いの絆を確め合い手を取り合ったことが、生
きる上で避けられない重要な要素であると認識されたもの
です。

もう一つは、あの大地震の大地の揺れと凡てを焼きつくそ
うとする炎に包まれたことで、言葉とは何かを見詰め直さざ
るを得なくなつていったことです。

かつて、この大地震の惨禍以上の惨状を我々は第二次世界
大戦末期の神戸大空襲で経験しています。この戦争は世界規
模のものでしたから、日本の大都市と同様に、あるいはそれ
以上に物質的、精神的ダメージを受けた国々があり、その民

た。しかしオレは彼のの才を借しみ、彼をそのかし、昭和
三十年代に二人で HALFHALF なる名前で連詩を書いて遊
んだ。昭和三十八年には詩集『かるそん』を僅部出版した。
羊歯は数年前より部屋に閉じこもり、半紙に水墨で書画を
書き始めた。いつしかそれは数百枚、いや優に一千枚を超
えていたが、敢えて他人には見せようとはしなかった。そし
て、いつの頃からかオレが訪ねるたびに、放物線状に痩せが
目立ちだし、自身、体力の衰退を嘆ずることが多くなつた。し
かし、彼はなぜかかたくなに医者を拒んだ。オレには致命的
なその姿に戦慄が走った。「死んだら書いたものはすべて灰

族や、市民の立ち上がりは困難なものでした。だが、すでに
第一次世界大戦を経験したヨーロッパの人達は、その悲惨な
現実を写し取るための新しい表現技法を手に入れ、詩を含む
様々な芸術活動を推進してきました。(例えば、T・S・エリオッ
トの『荒地』のように)。我々戦後世代にとつては、そういった
芸術活動、例えば、絵画ではキュービズムや抽象絵画が、詩
ではシュールレアリスムや韻律法の解体など従来の文法的
統一を打ち破る表現方法が、戦後日本の末期的状況をよく表
現するものとして用いられてきました。

ところが、GNPの高位に舞い上がる経験をし、バブル期
には自信を喪失、低迷を続ける私達に襲ってきた大地震を経
て、人は一人では生きていられないという思い、個性も大切
だが、相互扶助の精神や友情を求めめる気持ちが強くなつてき
たのだと思われれます。そういった気持、感情を表現するの
にふさわしい言葉とは何か。それが今我々に求められているの
ではないでしょうか。

ちなみに、今年には図らずも戦後六十年で一つの節目を迎
えます。憲法改正も取り沙汰されていますが、憲法を支えてい
るのも言葉です。言葉を一つ変えることで、白が黒になるこ
ともあり得る程、言葉の持つ力が大きいことを忘れてはなら
ないと思います。

私達が今迄培ってきた言葉の技法、表現方法はすでに一つ
の歴史ですから、無視するわけにいきません。これ等をふま
えて言葉の新しい繋がりを探し求めていくことが、人との繋
がりに結びつくのではないかと考えています。

安水元会長の就任挨拶のお言葉は「やわらかい絆でゆつく
り」とであり、伊勢田前会長は、「遠くまで、フェスティナ・
レンテ」でした。お二人共、ゆるやかな人々の結びつきと活
動が会の存続と発展に繋がると考えておられたのでしょ
う。蛇足ながら、その「絆」とは「言葉の繋がり」ですし、詩
の繋がりです。深い井戸にも似た人々の心に響く言葉の繋
がりの多様性が楽しみます。

にせよと家の者に言っている」と呟く一方で気に入ったもの
が書けると床に飾つたりもしていた。
播磨に珍しく雪の降り積もった今年二月一日、午後二十時
二分、羊歯は自宅でこの世を去つた。葬儀は坊主も戒名も不
要とし、家族六人だけで密かに終えた。辞世の句と思われる。
寒の水ゴクリ末期の水となる。
を残していた。病名は胃癌。七六歳であった。

- ⑤ 〈エッセイ〉「詩はどこにあるのか」渡辺信雄
- ⑥ 〈エッセイ〉「杞憂」藤本明子
- ⑦ 〈エッセイ〉「「褒美」村中秀雄
- ⑧ 〈エッセイ〉「新緑の頃」橋本千秋
- ⑨ 〈詩誌紹介③①〉「まほろば」の「こと」たかはらおさむ
- ⑩ 〈詩誌紹介③②〉「個人誌〈夜凍河〉」滝悦子
- ⑪ 〈詩誌紹介③③〉「個人誌〈D-Paradoxus〉」坂東里美
- ⑫ 会員の刊行物・県内情報など／県内詩誌・機関誌・雑
誌／関連行事／会員情報／他府県詩人団体情報／他府県詩
人団体の年刊詩集

兵庫県現代詩協会 会報第51号 特別付録
会報バックナンバー①

■発行所 兵庫県現代詩協会事務局 《山本真弓》
〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15 15-2003
Tel.078-241-3086

▽発行人 〓《時里二郎》(兵庫県現代詩協会会長)
▽会計 〓《玉川侑香》Tel.078-361-1334
▽会報特別号・責任編集 〓《大橋愛由等》

■印刷 〓《遊文舎》〒533-0012 大阪市淀川区木川東4-17
— 31 Tel.06-604-9325

■編集あとがき 〓兵庫県現代詩協会が1997年に発足
以来、年に2回発行してきた「会報」も51号と誌齢を重ね
てきました。そこで「会報」に記述された情報は、協会25
年の歩みのアーカイブとして記録しておくべきだと判
断。会報本誌とは別に特別号として編集することにいた
しました。この特別号は協会発行の『ひょうご現代詩集2
016』(2017・3・13)の巻末に掲載されている年譜
「兵庫県現代詩協会 20年の歩み」と併せ読まれることを
お勧めいたします。(大橋記)